

平和教育論および活動

広島市立安佐中学校 杉本麗次

はじめに

大槻和夫先生の御還暦祝賀会（九五・八）の際に、私は中学校の一場面から先生の平和教育に関するお仕事の断面を紹介させていただいた。

今回、本稿を担当するにあたり、「年譜および著述目録」に沿いながら先生のご論文を年代順に拝見し、ヒロシマを中核とする平和教育運動の歴史的な推進に多大な貢献をされていることに改めて驚いている。

「国語・文学教育と平和教育」という中心的なお仕事はもちろんのことであるが、広島県の被爆教職員とともに、歴史的な逆風に身を抗しながら、学校現場の平和教育運動の創造と実践構築を支えて来られた先生のお姿を少しでもお伝えできたらと思う。

平和教育運動の側面から

平和教育に関する大槻先生のご論文は、雑誌一九、共著単行本七、事典二、新聞二、という形で著されている（署名がないご論文もあり実際にはこの数を超えていると思われる）。雑誌についてだけ見ても、広島県教職員組

合教文部編の「広島教育」、広島平和教育研究所編の「平和教育研究」、日本平和教育研究協議会編の「平和教育運動」「平和教育」を中心に、運動と研究を統一せんとする研究者としての並々ならぬ熱い思いを寄せておられる。

早くから広島県教職員組合の教研集会の国語教育共同研究者として、現場教職員の教育実践を支援していただいていたが、先生が研究者としての本格的なお仕事を開始されていた一九六八年、この年が先生にとっても大きな転回点になったと思われる。

戦後、プレスコードによる弾圧や、一九五〇年代後半の文部省等による「逆コースの教育政策」など繰り返す反動の嵐の中で、平和の教育は散発的な実践を余儀なくされていた。被爆教師たちは「隠れ切支丹」のように点在し、もがき苦しんだという。そのようななかで、川島孝郎氏（当時翠町中学校教諭）らを中心とした被爆教師たちは、広島市内の小中学生を対象に「原子爆弾

（被害）に関する調査」を実施し、第一八次広島県教研集会で「原爆の実相を知らない」子どもと「学校で原爆を教えない」教師の恐るべき風化実態を報告した。一九六八年のことである。この告発に端を発し、翌年「広島県原爆被爆教師の会」が結成され、副読本「ひろしま—原爆をかんがえる—（試案）」（俗に言う「黄表紙本」）が作成された。広島に生きる教職員の責務として、この声は全国にも発せられた。

立ち上がった現場の教職員たちは、次々に副読本を作成し、「8・6登校」や「平和教育推進月間」を設定するなど、文字通り平和教育の組織的な取り組みがスタートしたのである。こうした平和教育の高揚の中で、平和教育の基礎理論の確立と体系化の必要性が求められてきた。こうして一九七二年六月に「広島平和研究所」が設立されたのである。また一九七四年には全国平和教育シンポジウムの開催を受けて「日本平和教育研究協議会」が結成された。大槻先生は、満を持してこの運動に身を投じられたのではない。広島平和研究所においては、第一研究部門（平和教育）と第四研究部門（資料整理）の研究員として設立と同時に精力的に活動を開始されている。

そして、大槻先生はこれからの平和教育の目的・内容・方法を体系化すべく、教育現場の指針となる『平和教育カリキュラム自主編成の手びき』(一九七五年試案)づくりにも多大なご努力を払われた。専門研究領域としての「国語・文学教育と平和教育」関係のご提言が、一九七四年から一九七八年あたりにかけて集中しているのはこのためだと推察される。

NGO国際会議でのご活躍など、多彩な平和教育運動と先生のかかわりについて、この誌面でお伝えすることは困難であるが、ご論文「広島における平和教育の歩みと今日の課題」(190)に平和教育の歴史的分析とともに先生の熱い心のうちが読み取れる。私情を抑えて簡潔に平和教育をめぐる歴史を俯瞰されているが、私には実に感動的なルポルタージュを読む思いであった。また、先生ご自身は「今日の課題」の項で、「きわめて大胆な仮説」と断っておられるが、先生のヒューマニズムと科学的な広い視野によって、教育課題を全国に発信されていることにも感銘している。

国語・文学教育と平和教育の側面から
大槻先生は広島平和研究所において、第四研究部門(資料整理)の部長としても、広島平和研究所所蔵の書籍を分類整理し目錄

を作成しておられる。大変な労力と時間のいる仕事であり、以前私にも溜息をもらされていたのを思い出す。

そうした基礎的な資料整理のお仕事のかたわらで、一九七二年、平和教育に関する大槻先生の最初のご論文「戦争児童文学による平和教育をすすめるために」(160)が発表された。これは、広島平和研究所が設立されて、最初に着手された「研究月例会方式」による「平和教育の基礎的問題の理論化」作業としての研究報告であった。戦争児童文学による平和教育を早くから手がけていた渋谷清視・江口季好・石上正夫氏らの実践を踏まえながら、次の三つの柱を立てて戦争児童文学を整理されている。

一 子どもに読ませたい戦争児童文学にはどんなものがあるか

二 子どもに読ませたい戦争児童文学を選ぶ観点をどう考えるか

三 戦争児童文学をどう読ませるか
一については先行研究の中から「戦争児童文学の基本教材表」なども引用されながら、学年系統を念頭においた作品紹介をしておられる。二では、「私論的メモ」と付言されながら、条件としての形象化の問題、さまざまな戦争体験、加害性の問題、戦争の非

人間性の問題、人間信頼のヒューマニズムの問題、平和を求めてたかった人々・今日もたたかっている人々への視点、の六つを指摘されている。具体的な作品を例にしながらの指摘であり、先生の読書量の広がりとその説得力に圧倒されてしまう。また、その原則性と科学性は今日の平和教育における文学教育の到達点をめぐりに展望している。三については、二との関連で五点にわたり「若干の私見」を述べておられるが、文学教育としての読み方の原則の問題や子どもたちの学習要求の問題、また系統性や現実とのかわり合いの問題など本質に踏み込んだ論述がなされている。

こうした地道な基礎作業と実践への大胆な理論化が、国語科における平和教育カリキュラムへと結実し、一九九〇年の「国語・文学教育と平和教育」(210)に集大成されているように思う。

「付記」 広島県教職員組合は「連合」加盟問題で、一九八九年に全広島教職員組合との事実上の分裂にいたり、広島平和教育研究所とは別に広島教育研究所が設立されている。大槻先生には、現在、広島教育研究所の研究員として、高校問題など広く教育の課題について私たちが教育現場の支援をしていただいている。